

川端康成「化粧」の指導法

－「基礎力」「思考力」「実践力」の育成－

小 埜 裕 二*

(平成28年9月1日受付；平成28年11月17日受理)

要 旨

本稿の目的は、今日、教育現場で求められている「基礎力」「思考力」「実践力」の育成を、文学教育を通して行うにあたって、その手立てを考え、具体的なテキスト読解を通して、その有効性を検討してみることにある。教科目標である国語力の育成を汎用的能力の育成へとつなげていくには、教える者と学ぶ者の意識の転換を前提とした、今少しの工夫と段階的な取り組みが必要になってくる。文学教育においては、文学テキストとどう向き合い、どう読ませるかが指導の中心となるが、教員養成大学の文学教育にあってはさらに、文学テキストを児童・生徒にどう読ませるかの指導方略を修得させることが求められる。本稿では、児童・生徒の汎用的能力の育成を目的とした指導方略を、教員養成大学の学生に修得させることを狙っている。文学教育で養う「読む力」「解釈する力」「批評する力」を、汎用的能力である「基礎力」「思考力」「実践力」の育成へと導く手順をそれぞれ8段階に分け、その手順を具体の文学テキスト読解に適用した場合、有効性が認められることを明らかにした。例に挙げた文学テキストは、川端康成の掌編小説「化粧」である。

KEY WORDS

文学の体験、21世紀を生き抜くための能力、基礎力、思考力、実践力、川端康成

1 「文学の体験」と「21世紀を生き抜くための能力」

本稿で考えてみたいことは、今日、新しい学習指導要領の指針として教育現場で求められている教科共通の教育目標である「21世紀を生き抜くための能力」の「基礎力」「思考力」「実践力」といった汎用的能力の育成¹を、文学教育の中で、児童・生徒に行うにあたって、その手立てを考え、具体的なテキスト読解を通して、その有効性を検討してみることである。「思考力」育成に関する具体的手立てについては本学(上越教育大学)においても、検討を進めてきた²。しかしながら「実践力」の育成手順は参照すべきものが少ない³。文学作品を読むことは、言葉の理解を始まりとするから、児童・生徒に国語の基礎的な力、各教科の基礎、生活の基盤となる力を修得させる。また、文学作品の中に隠されたメッセージを掘り出す解釈行為を通じて、論理的・批判的・創造的な思考力が修得される。自分の生き方や社会のあり方を模索するなかで実践力が修得される。そうであるなら、教科目標である国語力の育成を汎用的能力の育成へとつなげていくことは十分可能であろう。しかしそれを行うには、教える者と学ぶ者の意識の転換を前提とした、今少しの工夫と段階的な取り組みが必要になってくる。

稿者は、自身が勤める教員養成大学の文学教育において、アメリカの文芸批評家ロバート・スコルズの考え方⁴をふまえて、テキスト読解を「読むこと」「解釈すること」「批評すること」に分けて指導してきた。「読むこと」が他のテキストでも応用できるようになれば「読む力」がついたと言え、「解釈すること」「批評すること」も同様に他のテキストでも応用できるようになれば「解釈する力」「批評する力」がついたと言える。そうした力がつけば、文学教育における「国語力」は向上したことになるが、文学テキストはそうした力をつけさせるだけでなく、「読む喜び」「解釈する喜び」「批評する喜び」を感得させるよう、強くうながしてくる。われわれの生きる糧となるような体験を、文学テキストは読者に与える。この3つの喜びを体験させることを、稿者は「文学の体験」と呼んでいる。

文学テキストをどう読むかということは、文学研究者にとっては人生の課題に等しい。文学教育においては、その成果を用い、文学テキストとどう向き合い、どう読ませるかが指導の中心となるが、教員養成大学の文学教育にあってはさらに、文学テキストを児童・生徒にどう読ませるかの指導方略を修得させることが求められる。かつて川端康成の「化粧」という短いテキストを例に、種々の読み方を検討したことがある⁵。(「化粧」は児童・生徒の文学教材としてはレベルの高いものであるが、大学生を相手により深い文学教育を行うにあたっては格好の教材である。)教育現場で用いられる文学教材を丁寧に読む読解、新しいテキスト理論を導入した詩学的な読解、解釈学の知見をもと

*人文・社会教育学系

にした読解、その他、文化研究の方法や、構造分析の手法を取り入れた読解等を試みてきた。そうした読み方を身につける過程を通して、学生達が「文学の体験」をし、「基礎力」「思考力」「実践力」を身につけ、児童・生徒の国語力・汎用的能力を育ませる指導方略を修得させることを期待してきた。

しかしながら、実際に教員養成大学の大学生を相手に文学教育を行ってみると困難に直面することも多い。それは二重の意味においてである。学生達が「文学の体験」をすることなく、児童や生徒にどうして「文学の体験」を与えることができるかという常識的なことから話をはじめると、専攻が「国語」の学生でさえ小説を喜びとして読むことは苦手である。文学教育で得られた「国語力」を、自分の生きる糧に変換して受け取る体験がなかったからであろうか。「読むこと」「解釈すること」に限定された文学教育から、「読むこと」「解釈すること」「批評すること」をトータルに行う文学教育へシフトすべきであろう。「批評すること」が単に作品の感想を述べるものではなく、必要な手続きをふんで社会に参画しようとするものであることを知らせる必要がある。もう一つの困難は、大学生が「文学の体験」を行い、自信をもって児童・生徒の前に立つことができたとして、その体験が指導方略として活かしきれないということである。文学教育の過程において、またその延長線上において「基礎力」「思考力」「実践力」を育成していくことを含め、実践の場において活かす確かな手順を学ばせる必要がある。

文学は入りやすいが、到りがたい。しっかり読んでいるつもりなのに、肝心の大事なことが読みとれない。解釈は直感的な手続きを踏むから読めないのか。まじめに勉強しようとする学生達でも、そこから先へはなかなか進めない。私(人間)はいかに生きるべきか、私(人間)はいかなる存在か、世界とは何か、他者の気持ちをくみとる想像力や自分を相対化する目を養いたい、生き方・考え方の型を学びたい、そのような問いや願望に対するヒントを学生達が文学テキストから受け取り、その力を今度は児童や生徒に伝えることができるようにするには、どうすればよいのか。本稿では、児童・生徒の汎用的能力の育成を目的とした指導方略を、教員養成大学の学生に修得させることを狙って、以下、考察を進めていく。

文学の読み方は次のようになる。

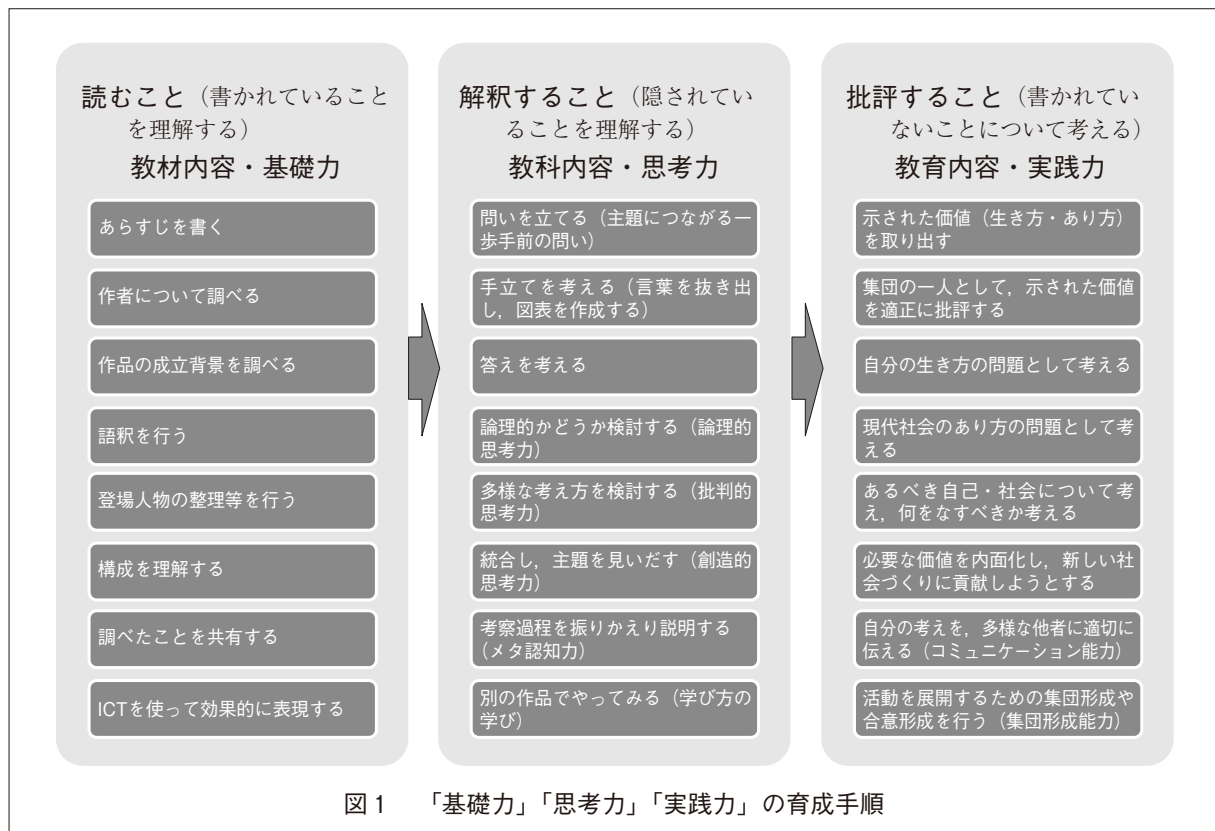
- A 読むこと（基本的な読みの理解）→書かれていることを理解する読み方
- B 解釈すること（主題や構造の理解）→隠されていることを理解する読み方
- C 批評すること（テキストとの対話）→書かれていないことについて考える読み方

「読むこと」は、あらすじ・作者・語釈・構成・人物・場面・時間等の整理・繰り返し出てくる言葉・対比関係等の整理を通じて行う。「解釈すること」は、文学テキストに隠されている大事なことを掘り出すために、何がポイントなのか解釈上の問題を設定し、その問題を解決するために何を整理すればよいかを考え、その整理をもとに、解釈を導きだしていく。（解釈には、テキストだけを扱うレベルと、テキストとそれととりまく時代状況や文化状況とのかわりを扱うレベルがある。）「批評すること」は、読者自身がテキストと対話するなかで、読者自身や現代社会の諸問題に関わるコンテキストと関連づけて、生き方やあり方、価値の問題を考える。個人の好き嫌いでなく、集団の利益を代表して、文学テキストのメッセージや諸価値を批評していく。文学作品のなかには、われわれが了解しうる世界が入っている。その世界に生じる出来事を通じて、主人公の生き方や考え方、大切にされる価値について、われわれは知ることになる。

大学における文学教育は時間的に限られたカリキュラムの中で行われるのがふつうである⁶。そのなかで読む力の育成を通じた「文学の体験」を各人が実感し、確かな実感をもって教室に立ち、児童・生徒に同様の「文学の体験」をさせることを願って授業を構成するが、なかでも育成が難しいのは、作品テーマを読みとるために「隠されていること」を理解する読み方、すなわち「解釈する力」を身につけさせることである。「批評する力」を身につけさせることも難しい。図1は、文学教育でこれまで行ってきた「読むこと」「解釈すること」「批評すること」の手順に、工夫を加え、文学教育において「基礎力」「思考力」「実践力」を育成するための手順を示したものである。汎用的能力の育成は、そのみが単独で育成されるものではなく、教科内容を学習するなかで育まれていくものであろう。汎用的能力の育成手順は、教科内容の育成手順と重なるところが多い。汎用的能力を児童・生徒に育ませる指導方略を文学教育の延長線上に組み込むことができるなら、文学教育の意義は高まるであろう。

次節以降では、図1に示した手順を仮説と捉え、実際に川端康成「化粧」のテキストを使って、「読む力」「解釈する力」「批評する力」を「基礎力」「思考力」「実践力」の育成へつないでいけるかどうかを考察し、仮説の有効性を検討してみたい。なお、「基礎力」「思考力」「実践力」の考え方は、「平成24年度プロジェクト研究調査研究報告書教育課程の編成に関する基礎的研究報告書5－社会の変化に対応する資質や能力を育成する教育課程編成の基本原則〔改訂版〕－」（平成25年3月、国立教育政策研究所、以下「報告書5」）に基づいている。具体的な手順を考え、実

際に適用可能かどうかを試みたものが本稿である。



2 基礎力

読み方に絶対的なものはないし、解釈に唯一のものはない。古典といわれる作品が今も読み継がれているのは、解釈がつねに多様に更新されていくからである。多様な解釈を許容することを前提にしたうえで、自分の解釈をもち、自分の考えを創造的に組み上げていくことができるような手立てを考えてみたい。大学の授業では、図1の手順ののっとり、それぞれを8段階に分け、〈基礎力〉〈思考力〉〈実践力〉の育成を目指す。

「読むこと」が他の作品でも同じように出来るようになれば「読む力」がついたと言えるが、「読む力」の育成は「基礎力」の育成に寄与するものであろう。ただし言語活動の「読む」「書く」「話す」「聞く」領域すべてにおいて「基礎力」の育成が求められるとすれば、「読むこと」においては、「話す」「聞く」の活動が少ないことが分かる。それを文学教育において補うとすれば、「基礎力」育成の段階において、「話す」「聞く」活動を意識的に取り入れていく必要がある。また、これからの知識基盤社会においては、基礎的な知識・技能を備えるだけでは足りない。「報告書5」では、高度なリテラシーを備えるために、「言語的リテラシー」「数量的リテラシー」「情報リテラシー」をわれわれが生きる複雑な社会に対応できる能力にまで高めなければならないと述べている⁷。言語を理解するだけでなく、あわせて数量的な情報を理解し、ICTの知識やスキルも修得しなければならない。文学教育において身につけるべき「読む力」は、テキストに「書かれていること」を正確に読みとる能力のことと捉えることができるが、「基礎力」育成を図るためには、さらなる工夫と取り組みが必要である。

「読む力」を育成するための手立てとしては、次の項目を立てて整理していく。①～⑥が「読む力」の育成、⑦⑧を加えた①～⑧が「基礎力」育成の手順となる。

- ① あらすじを書く
- ② 作者について調べる
- ③ 作品の成立背景を調べる
- ④ 語釈を行う
- ⑤ 登場人物の整理等を行う

- ⑥ 構成を理解する
- ⑦ 調べたことを共有しあう
- ⑧ ICTを使って効果的に表現する

「読むこと」は「書かれていることを理解する」段階であるから、それぞれを簡潔に行うよう心がけ、「思考力」及び「実践力」育成のための時間を残すよう指導する。文学作品によっては⑤のなかで、キーワードや、繰り返し登場する言葉、時間や空間の特徴について整理する。そうした作業を進めていくうちに作品に対する理解が深まり、何が問題なのか、何がテキストの背後に隠されているのかを考えるスタート地点に立つことができる。「読むこと」の段階で遠まわりをすることが、次の段階となる「思考力」育成の最短の道となる。

この間、自他の言葉をしっかり区別するといった研究倫理について語り、また文学テキストに向き合う姿勢、授業への向き合い方について話をする。アクティブでディープな学習とは何か。主体的・能動的・自立的な学習とは何かといった話も行う。引用の仕方、辞書・文献の調べ方についても教える。レジュメの書き方も伝える。既存の答えを鵜呑みにするのではなく、それを疑い、裏づけていくことを教える。メディア・リテラシーに注意をうながし、コードとの関連づけ（作者・時代状況）を重視させる。教員養成大学においては、読み方を学ぶと同時に、読んだ内容を教材の価値として位置づけ直す能力や指導方略の修得が求められることを教える。

「化粧」を例に、「基礎力」育成が具体的に可能かどうか考えてみたい。以下の作業は、演習形式の授業で学生が主体的に取り組むことを前提にしている。「読むこと」においては、ICTを効果的に活用させる。

① あらすじを書く

あらすじを書くことは「読むこと」の基本である。あらすじには、作成者の解釈が入る。あらすじを何度も読み直し、短く簡潔なものに書き直させる。その作業の過程で「読むこと」の重要な個所が見えてくる。あらすじを絞り込めば、そこに残るのは捨てることのできない物語の筋であり、主題を構成する言葉の集まりである。あらすじを書くことは「基礎力」修得にとってとりわけ重要である。川端康成「化粧」（「文芸春秋」昭和7年4月号）のあらすじは、次のようになる。

私の家の厠は、谷中の斎場の厠と向かい合っている。私は、家の厠の窓から、厠と厠の間に捨てられた白菊や紅薔薇を見る。斎場の厠で、若い女が化粧をしているのを見ることもある。私はそういう奇怪な化粧を見たくはない。ところが昨日、十七、八の少女が斎場の厠で泣きじゃくっているのを見た。その窓が私に植えた女への悪意が拭い取られていくのを感じていると、思いがけず少女は小さい鏡をとりだし、にいつと笑って厠を飛び出した。私には謎の笑いである。

② 作者について調べる

作者の情報は、長短とりまぜ、複数の事典類（ネット上で利用できる事典類やDVDになった事典類、紙媒体の事典、作家について書かれた研究書類の情報）を参照させる。ウィキペディアのような書き換えが随時なされるネット情報を参照することも可としているが、それが確かな情報でない可能性があることに気づかせなければならない。ネット情報はすべてアドレスと引用日を明示させる。自分の言葉と他者の言葉をはっきり区別させる。作者情報は、テキストの空所を埋めるものではなく、テキストの意味を差異の観点から引き出すものであることを教える。

③ 作品の成立背景を調べる

作品が最初に発表された雑誌や新聞名、年月日に関する情報を「初出」という。その作品が後に単行本等に収録された場合は、その収録情報も記させる。「化粧」であれば、初出は「文芸春秋」昭和7年4月号（第10巻第4号）。「短編集」と題して「顔」「化粧」「妹の着物」の3編が発表された。「化粧」が最初に収録された単行本は『純粹の声』（昭和11年9月、沙羅書店）である。初出本文とその後の単行本文では、作者の手が加わることでテキストに異同が生じる場合がある。手にしている本文がどのテキストを底本（依拠した本文のこと）としているのかにも注意させる。成立の背景は、書誌的な情報だけでなく、作品が発表されるにいたった作者の当時の状況や具体的な執筆動機、作品が生まれるにいたった文学史のあるいは時代的な状況を明らかにすることが重要であることを伝え、それについて調べさせる。

④ 語釈を行う

語釈は、単に作中に登場する難解な言葉を調べるだけでなく、作品の背景になっている考え方なども調査させる。「化粧」で語釈をつけるとすれば、「谷中」「斎場」「放鳥」「鳥屋」等となる。「化粧」であれば、昭和初年代の化粧

のありかた、女性の社会進出のありようなどを調べることになる。

⑤ 登場人物の整理等を行う

主要な登場人物の整理を中心に行う。「化粧」でいえば、登場人物によって空間の意味合いが相違してくる点が注目される。「斎場の厠の空間」は、「老婆」にとっては生を確認する場となっていない。「若い女」にとっては死者に触発され、自らの生を確かめる場であった。「少女」にとっては死者を悼む場であり、ついで自らの生を確かめる場であった。一方、「私」にとっての「厠」は人間の生死のありようを確かめる場であった。

⑥ 構成を理解する

構成は、単に内容段落に短い言葉を与えるだけではなく、その構成が何を意味するかを考えさせることが大切である。はじめと終わりがあり、途中に出来事がある。出来事を通して、当初の属性がどのように変化したのか考えさせる。「化粧」の構成にインデックスを附せば次のようになる。

- (ア) 白菊の花の香りをかぐ
- (イ) 桔梗や紅薔薇の枯れていくさまを見る
- (ウ) 若い女が厠の中で化粧をする
- (エ) 十七八の少女が厠の中で泣く
- (オ) 十七八の少女がにっこりと笑って厠を出る
- (カ) 私には謎の笑いである

この構成から何が分かるかを考えさせ、記述させる。植物の話が前半にあり、それを受けて「若い女」と「十七八の少女」の話が後半に置かれている。「植物」「人間」の2分法の構成は、「白菊」「紅薔薇と桔梗」「若い女」「十七八の少女」の4分法に細分化される。「植物」と「人間」の対比において、化粧を行うのは人間だけであることに気づかせたい。

「読む力」を修得させるためには、他にも種々の訓練を文学作品に応じて行う必要がある。いくつか例を挙げてみよう。「化粧」は幾つかの空間に分けられる。〈厠以外の斎場の空間〉〈斎場の厠の空間〉〈厠と厠の間の空間〉〈私の家の厠の空間〉〈厠以外の私の家の空間〉の5つの空間である。そのことに気づかせ、役割を考えるように言う。物語の時間構成は「九月半ば」「三月初め」「昨日」に分かれる。そのことに気づかせ、「九月半ば」「三月初め」と季節の変わり目に時間帯が設定されている理由を考えさせる。色彩イメージに注目すると〈白菊に代表される白のイメージ〉〈紅薔薇や若い女の口紅に代表される赤のイメージ〉〈ハンケチで涙を拭く少女の白のイメージ〉に分けられる。そのことを指摘させ、その意味を考えさせる。

「化粧」のテキストはどこから物語らしくなるのか。それを指摘させ、発表させる。物語中の出来事は〈見るもの〉である「私」の思考のフィルターを通して捉えられる。必要なエピソードだけが物語中に登場し、その中で「私」は植物と人間のありようを通し、生きることや老い衰えることの意味を考えている。登場人物の一貫性、出来事の一貫性に気づかせ、その意味を考えさせる。同じ言葉の繰り返しにも注意を向ける。「葬ひの花々が腐つてゆく日々も見なければならぬ」「人間もまた見なければならぬのである」といった「見なければならぬ」の表現は、見たくないものからも目を背けることができない「私」の使命といったものを感じさせる。そのことを指摘させ、意味を考えさせる。さらに、「街頭や客間の女達の化粧からも、葬式場の厠のなかの女を思ひ浮かべるやうになれば、それは確かなしあはせにちがひない」と「彼女だけは、隠れて化粧に來たのではあるまい。隠れて泣きに來たのにちがひない」の「ちがひない」に気づかせ、その意味を考えさせる。

文化に関するコードは、本テキストにどのように作用しているか。学生達にICTを活用させて調査することをうながす。「谷中の斎場」は東京都台東区北西端にある都立の谷中霊園の斎場である。明治7年に市民の共同墓地として開園した。約6500基の墓碑がある広大な谷中墓地の非日常的空間は、「私」の住まう日常的空間を圧倒するように広がっている。〈見るもの〉と〈見られるもの〉の間には、価値システムの不均衡が見られる。「私」の家の向こうに広がる広大な「谷中」墓地の非日常空間の世界は、女達が内に秘めてもつ深淵な世界と響きあうものである。このことにも気づかせたい。

「厠」の民俗学的意味についても調査させたい。「便所に関する注目すべき習俗に便所神の信仰があり、中国にも似たような慣習がある。(中略) 便所神は出産と深い関係があつて、妊婦がよく便所掃除をしていれば美しい子供が生まれるという俗信は全国的である。」⁸「厠」は聖と俗が反転する場所である。とくに命の誕生とかかわる場所だということが注目される。斎場の厠で「十七八の少女」は死者のために涙を流すが、やがて笑顔を見せる。斎場の厠は

〈俗なるもの〉が〈聖なるもの〉となる可能性を潜めつつも、〈聖なるもの〉が〈俗なるもの〉に墮する空間として登場する。

「白菊の花に」「じつととまつてゐる」カナリヤの可憐なイメージは、テキスト後半に登場する「十七八の少女」のイメージにつながる。だがその「十七八の少女」は豹変し、「ひらりと厠を出て」いく。両者の共通点と相違点に気づかせ、その意味を考えさせる。他にも、本テキストの焦点化（一人称視点）がテキストの意味生成にどのような役割をもっているのか問うてみたり、「化粧」と一緒に発表された「顔」「妹の着物」との関係を考えさせることも大事であろう⁹。川端康成が斎場の裏手に住んでいたこと、当時、妻秀子の妹が同居していたことも確かである。加えて「化粧」に描かれた同様の体験を川端はもった¹⁰。だが「化粧」に語られた場所や体験が作者のものであっても、表出された感情までが同じであるとは限らない。この点についても考えさせる必要がある。

もちろん以上の項目をすべて検討させる必要はない。グループ活動を通じて、それぞれが別々の課題を検討し、その成果を手順⑦において共有しあうこともよい方法であろう。そのとき「話す」「聞く」の活動が行われるはずである。そしてそれらをまとめる形で手順⑧を行う。文学テキストに書かれていることを情報として取り出して整理すること、さらに文学テキストに関連する情報を、ICTを活用して取り出し整理すること、こうした営みが「基礎力」の育成につながる。

3 思考力

文学テキストに隠された大事な意味を掘りだすには、どうすればよいのか。「思考力」の育成は、次の手順で行う。以下は、本学で国語を担当する教員たちとともに作成した「思考力」育成のための手順である¹¹。

- ① 問いを立てる
- ② 手立てを考える
- ③ 答えを考える
- ④ 論理的かどうか検討する（論理的思考力）
- ⑤ 多様な考え方を検討する（批判的思考力）
- ⑥ 統合し、主題を見いだす（創造的思考力）
- ⑦ 考察過程を振りかえり説明する（メタ認知力）
- ⑧ 別の作品でやってみる（学び方の学び）

8項目のうち、最初の6項目が主に「解釈すること」に関わるものである。⑦⑧を加えた①～⑧が「思考力」育成を念頭においた手順となる。授業では、個人の考察、グループ討議、代表者による発表、授業を振り返り主題について考えたものを文章にする作業を取り入れることで「思考力」育成を図っていく。

問いを立てることは、難しい。「読むこと」と「解釈すること」の間にある溝を「読むこと」の丁寧な作業によって狭くすることはできても、「解釈すること」の地平に立つことはなかなか学生には困難なようである。問いを立てるさい、「作品テーマは何か」といった安易な問いは控えるべきであると学生に伝える。それは⑥の「創造的思考力」のなかで、最終的に受講者が向き合う問いだからである。作品テーマに迫る一歩手前の問いを立てること、そしてそれは考える具体的な手立てのある問いであることが望ましい。一つないし複数の問いをたて、具体的に作品の中から言葉を取り出し、表にすることで、その問いに対する答えを導き出させる。表は自身の考えを整理するために、また人に伝えるために必要であることを伝える。

実際に児童・生徒に対して授業をするときは、「読むこと」から「解釈すること」への橋渡しをする手立てを用意させておく必要がある。また問いを考察するために必要な本文の言葉を抜き出させる方法についても指導する必要がある。児童・生徒の論理的思考力、批判的思考力、創造的思考力の育成はその後になる。児童・生徒の「思考力」を育むためには、ときには問いや手立てを最初に与え、そこから考えを深めさせる学習が必要である。学習者の実態によっては、手立てを与えないことも、手立てを与えすぎることよくないことがある。問いを立てるためには、どうすればよいか。問いが立つまで自分で丁寧に読み込むことが肝心だが、次のような問いの立て方を提示しておくことも大事であろう。

- ・冒頭部での主人公の属性付与は、出来事を通じ、結末部でどのように変わったのか。
- ・タイトルの意味。

- ・主人公の気持ちの変化を場面とともに読み取る。
- ・主人公と他の登場人物との関係を考える。
- ・時間・空間の特徴について考える。
- ・語り方の特徴について考える。
- ・作品の背後にある文化コードについて考える。
- ・対比関係を考える。
- ・結末部分をじっくり読んでみる。

「化粧」の場合は、どういう問いになろうか。ロバート・スコルズは主題を考えるさいにまず対比の関係に注目することを勧めている¹²。〈見るもの〉と〈見られるもの〉の対比から、「私」と「女」の関係を考え、〈見られるもの〉が、「植物」「人間」の2つに分かれ、それがさらに「白菊」「紅薔薇と桔梗」「若い女」「十七八の少女」の4つに細分化されていることが分かる。「化粧」のテキストが、「植物」と「人間」の話に2分されることの意味を全体の話の流れを考えながら整理していけばよい。その全体の構図の中で、「若い女」「十七八の少女」の化粧や涙、謎の笑いの意味が解けていくはずである。「化粧」では、「斎場の厠の窓に、私はまた人間も見なければならぬのである」という一節の「も」が重要な語となっていることに気づかせなければならない。「も」に注目すると、輝き萎れていく植物の運命に人間の運命が重ねられていることに気づく。植物同様、人間もまた生命がもつ自然のサイクルを免れえないという意味がこめられていることに気づく。そこから「若い女」の化粧の意味が浮上してくる。

「奇怪な化粧」とは何か？ 少女の涙の意味は？ 「確かなしあはせ」とは何か？ 「女への悪意」を「拭ひ取られたい」と思うのはなぜか？ 「十七八の少女」の涙の意味は？ 少女の笑いの意味は？ 「水を浴びたやうな驚き」とはどのような驚きか？ 「謎の笑ひ」の意味は？ 「化粧」における「解釈すること」は、作品全体の流れを「植物」「人間」の内分法に留意し、その流れの意味をたどっていくなかで重要な言葉に注目し、その意味を掘り下げていくなかで行われる。そのように読めば、最初にもどって〈見るもの〉である「私」と、〈見られるもの〉である「若い女」には、顔を隠す〈覆面〉と顔を変える〈仮面〉の象徴性が付与されていることに気づくであろう。「私」は〈覆面〉をつけるように自分の姿を隠し、斎場の厠の様子をうかがう。「若い女」は〈仮面〉をつけるように化粧や笑みで顔を別ものに変える。〈覆面〉も〈仮面〉も、それによってある確かなものをたぐりよせようとする行為である。しかし、どちらも求めるものは得られない。〈見るもの〉と〈見られるもの〉の間に干渉しあうことのない反復と沈黙がある。それがいたましさを読者に感じさせる。おそらく、このあたりに川端康成の文学の特徴があるといつてよいであろう。

中心が定まると、空間の役割も人物の役割も理解されてくる。物語の時間が「十七八の少女」が〈聖女〉から〈魔女〉へ変貌する変化と響きあっていることがわかってくる。語りの現在が曖昧になっていることも、女の存在の不可思議さと響きあっている。カナリヤの表現効果についても考えられよう。カナリヤは、泣きつかれて壁にもたれている少女さながらである。だが「十七八の少女」は、カナリヤとは対照的に豹変する。生と死の間にいるカナリヤと違って、少女は斎場の厠の中にいる。そうした空間の違いがカナリヤと少女の違いに関与していることが推測されるだろう。

解釈がある程度進めば、その解釈は論理的に整合性のとれたものか、他の読み方はないかといったことを考えさせる段階に入る。グループでの話し合いを通じて、自分とは異なる意見に出会い、自分の読み方の是非を考えさせるようにする。解釈行為においては、無理に一つの答えにまとめるのではなく、問いをたて、手立てをはっきりさせ、解釈の根拠を互いに照らし合わせていく。創造的思考力は、問いの答えを言葉の論理のなかで収束させる方向と、同様の手順によって読まれた読みを認め、広げていく方向の二つの方面で養われていく。

「思考力」の育成は、①～③の「解釈すること」が行われた後、その内容を種々検討する過程で大きく前進する。そこで得られる能力が④⑤⑥の「論理的思考力」「批判的思考力」「創造的思考力」である。⑥の創造的思考力では、最終的に「化粧」がどういった作品なのか、自分が他の読み方や仲間の読み方を受けて組み立て直した主題を記述させる。さらに⑦⑧の手順に従い、①～⑥までの過程をもう一度振り返らせ、説明させるようにする。そして同じことを、別の作品でやらせてみる。たとえば「化粧」と同じ時に発表された「顔」「妹の着物」を取り上げたり、化粧の意味が異なって用いられる川端康成「禽獣」（「改造」昭和8年7月）を読ませたりするのである。

4 実践力

「批評すること」を、手順をもとに進めていくことができれば、文学教育に寄与することができる。「報告書5」

には、依拠すべき大事な提案がある¹³。「解釈すること」は作品テーマを探り出す文学教育にとって重要な営みであった。それができれば、その結論をもとに、自分の生き方や自分たちが生きる現代社会について考え、よりよい生き方、よりよい社会を模索することもできるであろう。「批評すること」を始めるには、まず文学作品の中に表された生き方、考え方、諸価値を取り出す必要がある。それを自分たちの問題として主体的能動的に受け取り、正当な批評的距離を取りながら、自分や社会の在り方を考えることになる。文学作品がもつ諸価値はさまざまであり、作品ごとに異なる。読者がそれを自身の価値として受け取ることができれば、「実践力」の一端はついたといえる。

「解釈すること」を通して修得を目指した汎用的能力の「思考力」を、教室の外へつなげていくことが「実践力」育成の重要な契機となるが、児童・生徒を、一足飛びに社会をよくするための実際的な活動に参加させるのは困難であろう。その意味で、文学教育において目指す「実践力」の育成も、教室で得た諸価値を教室の外に持ち出し、自分の生き方や社会の在り方に活かそうとすることが一つの到達点となろう。価値の取り出し、価値の正当な批判、価値の内在化が重要な観点になってくる。教室で得られた「思考力」を外に持ち出すための方法として、コミュニケーション能力を鍛え、集団形成の能力をもち、仲間とともに自分たちの考えを押し広げていく力を持たせることも大切になってくる。それは協働力であり、合意形成能力である。集団を動かす力は、コミュニケーション能力の育成と同時に「実践力」育成には欠かすことができない。

「実践力」の育成手順を、「報告書5」の主張をもとに、①～⑧の8項目に整理した。「報告書5」が言う「自律的活動力」の下位項目にあたるものが①～⑤、「人間関係形成力」の下位項目にあたるものが⑦⑧、「社会参画力」の下位項目にあたるものが⑥に相当する。①～⑥が「批評すること」育成の手順であり、⑦～⑧を加えた①～⑧が「実践力」育成の手順となる。

- ① 示された価値（生き方・あり方・考え方）を取り出す
- ② 集団の一人として、示された価値を適正に批評する
- ③ 自分の生き方の問題として考える
- ④ 現代社会のあり方の問題として考える
- ⑤ あるべき自己・社会について考え、何をなすべきか考える
- ⑥ 必要な諸価値を内面化し、新しい社会づくりに貢献しようとする
- ⑦ 自分の考えを、多様な他者に適切に伝える（コミュニケーション能力）
- ⑧ 活動を展開するための集団形成や合意形成を行う（集団形成能力）

「化粧」を例に考えてみる。まず作品中に示された価値を取り出してみる。

- A. 川端は「化粧」を、男／女の関係、見る／見られるの関係に置き、男／女の間を、清浄無垢を志向するもの／魔女を志向するものといった役割にふりわけ、女性の利益を守る立場からすると、本作は女性の主体性が抑え込まれ、歪められた作品と読める。
- B. 若い女達は「罪の思ひ」を全身に感じていた。斎場の厠の中にも拘束力がある。その拘束力は内面化された道徳的価値のことである。斎場の厠の化粧が「魔女の仲間入り」をすることだと考える「私」の意識も道徳的価値に関わる。

A.について考えてみよう。価値とは、作品の中に示された生き方や在り方、考え方のことである。常識的な価値を押し出してくるものは、一般的には、文学テキストとしては上位に位置するものではなかろう。時代の中のものの考え方（規範）をコードというが、コードに最後まで従属する形で書かれたものは文学性が高いとはいえない。文学テキストにおいて示される価値は時代のものの見方に対するその作者の新しい提案、疑いの提示という形で提出されることが多い。

「若い女」が自分だけは衰えない、生きていたいという思いに忠実であることは、人間に対する川端康成の深い洞察に拠るものだと評価する人がいるであろう。「十七八の少女」の中にある〈聖女〉と〈魔女〉の併存を人間存在の不思議であると捉える川端の認識にしても同様である。しかし相手へのいたわりより、わが身を優先するエゴイズムが、女性特有のものであると読まれ、それが社会に流布すると考えれば、女性の利益を代表して批判を加える必要も生じてくる。この点について、女性の学生と男性の学生に、「化粧」に違和感を持つかどうかを問いかけてみることは「批評すること」がどのようなものであるかを実感させるために大事な作業になってくる。テキストが読み手に

与える社会的影響を重視する態度は、マイナーへの配慮、それへの共感をうながす。

しかしながら、本作は〈見るもの〉〈見られるもの〉の対比から、〈男〉〈女〉の対比に向かいがちであるが、〈見るもの〉が男性全体を代表しているわけではなく、〈見られるもの〉も女性全体を代表しているわけではない。内に隠された男女に共通する普遍的な人間の顔を、密室を介して観察していると捉えてもおかしくはない。人間の裏の顔をのぞき見しようとする「私」の方に、気持ち悪さを感じる読み手も多いであろう。「私」には、「若い女」が抱く隠れて悪いことをしている罪の思いはない。そこに批判の目を向けるべきかもしれない。「若い女」を一方的に「私」の目で断罪するような姿勢が「化粧」にはある。「私」を用いた一人称小説では、「若い女」の客観性は保証されない。あくまで「私」の主観によって捉えられた女性像である。

斎場の厠で化粧をする「若い女」の姿がエゴイスティックであるゆえに人間的であり、逆に隠れて斎場の厠をのぞいている「私」に非人間的な冷たさを見る読み手もいよう。女性に魔女的な姿しか見ようとしないう「私」の態度に問題を感じる読み手があっても不思議ではない。川端文学の美学に共感するものもいれば、共感しないものもある。価値は相対的である。しかしながら川端のテキストに目を通した読者は、真理を見すえようとする彼の冷徹な目を支持する者も多いのではないか。文学テキストの感染力は強い。だからこそ健康的な批判的視座を常に保つことが必要なのである。

B.について考えてみよう。「若い女」に内在する道徳的価値はわれわれが生きていくなかで自然に身につけたものである。人が亡くなったとき、自分が生きていることを喜び、おのれの生の伸長を願ってはいけないという価値を身につけてきた。人の死を喜んでいるわけではないのなら、一方で自分の生の伸長を願い、自分が生きていることを喜ぶのは不自然ではないという考え方も成り立つが、人間の一回かぎりの死を悼むことを「私」は道徳的に最善の在り方としている。

それ以外の選択肢を拒むような潔癖さが「私」にある。若い女たちの生き方を人間的な態度として理解しようとはしない。「私」が抱く〈女性の純潔を願うコード〉を相対化するのが、女性の〈世俗的な生のコード〉である。読者はかえって「私」がなぜそれほどまでに女性の清らかさに固執するのかと考える。「私」は、斎場の厠の中で行われる女達の化粧の意味を彼女達の思いに寄り添い、共感的に受けとりはしないし、彼女達を理解し、そこから人間を発見しようとはしない。その意味で、本作は他者性を際立たせる物語となっている¹⁴。

文学作品はその時代の考え方のなかで作られる。文学作品は規範に従い、規範を超えていく。「斎場」のコードについて考えてみよう。明治時代の葬儀に比べ、大正時代は葬儀が質素になり、追悼送別の意が失われた¹⁵。じっくり喪に服すことのなくなった時代状況が本作の化粧を生み出したといえよう。次にモダンガールの時代について考えてみよう。「化粧」は、昭和初年代のモガ・モボ流行のなかで女性の化粧が盛んに行われた時期に書かれた。流行を歓迎する動きと、流行に反対する動きが共存した。斎場の厠の窓という設定を通して、川端は他の場所では見ることのできない〈新しい女〉の裏の顔を捉えた。川端は規範や価値に敏感な作家であった。化粧が歓迎される世の中にあつて、川端は化粧の行為に内在するエゴイズムを前面に表そうとした。内在化した道徳を踏み越えてまで、自己を中心に生きようとする〈新しい女〉の意志を批判した。

川端康成はこの短い小説を何度も折り返すように物語を展開させている。「化粧」は読者の予想を覆すテキストとなっており、その意味でも純文学のコードに従ったテキストとなっていることがわかる。「私」が女達に抱く期待は繰り返し裏切られ、最後には「謎の笑ひ」という言葉で少女の笑みを封印させる。道徳をふみ超えていく「若い女」を批判する一方、「化粧」の「私」は「若い女」の態度を時代状況的にもはや抑えきれなくなっていると考えよう。なベシミズムに彩られている。そうした「私」のなかば諦めにも似た悲痛な思いを支えているのが、芸術がもつ語りの力である。

価値は相対的なものである。そのうえで守るべき価値とは何かについて考えさせること、そうした価値に関するレッスンを行わせることが「実践力」育成には必要である。価値を取り出し、価値について考える。必要があれば集団の一人として批判を行う。ここまでが手順①②である。次に③自分ならどう考えるかについて考えさせる。自分なら若い女の化粧に理解を示せるだろうか、それとも「私」と同じ思いをもつだろうか。あるいは「若い女」が自分ならどうか。④今の時代ならどうか。規範意識の薄れた現代にあつては、「若い女」が抱く「罪の思ひ」のようなものはどこに身をおいてももはや感じとれないものになっているかもしれない。現代の読者は、人間の裏の顔についてとやかく言うべきではないと言うかもしれない。見えないところは問題にすべきではないと。

ではどうすべきなのか(⑤)。女性の利益を守るために、「化粧」を批判するか。「化粧」に書かれたような生き方・在り方を否定し、慎みぶかく、思いやりに満ちた生活を自分一人だけでも送ろうとするか。考えの形はいろいろであろう。その考えを内面化し、新しい社会づくりに貢献しようとする思いを確かなものにすることが大切である。

(⑥)。そのさい、多くの人と意見交換を行う (⑦)。その中でコミュニケーション能力と協働力を身につけ、合意形成能力や集団形成能力を身につける (⑧)。文学テキストは、価値の形成を促すものとして格好の教材である。「実践力」を育成するには、「批評すること」からさらに意識的にもう一步前に進み、積極的に価値を内在化させること、そしてあるべき社会を描き出し、その社会を作っていくために多くの人と意見をかわし協働することが必要になってくる。

5 成果と課題

本稿では、児童・生徒の汎用的能力の育成を目的とした指導方略を、教員養成大学の学生に修得させることを狙って、これまでは文学教育で養ってきた「読む力」「解釈する力」「批評する力」を、汎用的能力である「基礎力」「思考力」「実践力」の育成にまで導くための手順をそれぞれ8つに分け、その手順が具体の文学教材を指導するさいに適用できるかどうかを検証した。8つの過程を具体の文学作品に適用した結果、その手順を汎用的能力の育成方法に用いる道筋がついたと考える。汎用的能力の育成は、教科内容を学習するなかで育まれていく。一方、手順そのものの妥当性については、なお検討の余地があろう。本稿では「基礎力」「思考力」「実践力」の育成を、「読むこと」「解釈すること」「批評すること」の修得後に接続させる形で手順化したのが、「読むこと」「解釈すること」「批評すること」の過程全体あるいは途中で育成する方法についても考えていきたい。

注

¹ 「平成24年度プロジェクト研究調査研究報告書 教育課程の編成に関する基礎的研究報告書5－社会の変化に対応する資質や能力を育成する教育課程編成の基本原則〔改訂版〕－」(平成25年3月、国立教育政策研究所)及び「教育課程企画特別部会論点整理」(平成27年8月26日、文部科学省教育課程企画特別部会)等。

² 『「21世紀を生き抜くための能力」の「思考力」育成の捉え方(内部資料)』(平成28年3月、上越教育大学)に改訂を加えたものが、平成28年度末に公開される予定である。10教科、教職7領域において、「思考力」の育成手順と評価規準の作成を行った。

³ 注1に掲げた「平成24年度プロジェクト研究調査研究報告書 教育課程の編成に関する基礎的研究報告書5－社会の変化に対応する資質や能力を育成する教育課程編成の基本原則〔改訂版〕－」のpp94～95の表1「各学校段階で育成することが期待される実践力と共有価値」が参考になる。

⁴ ロバート・スコールズ「教室の中のテキスト・一」(『テキストの読み方と教え方』折島正司訳、岩波書店、1987年7月)

⁵ 拙稿「川端康成「化粧」の表現機構」(「上越教育大学研究紀要」平成9年3月)、「川端康成「化粧」の表現機構(2)」(同、平成17年9月)、「川端康成「化粧」の解釈学」(同、平成19年3月)、「川端康成「化粧」の文化研究」(「イミタチオ」平成20年12月)、「「化粧」の構造分析」(「上越教育大学研究紀要」平成22年2月)。

⁶ 上越教育大学の場合は、学部2年生後期の「国文学講読B」と3年生前期の「国文学演習B」の計30コマ(1コマ90分)で、1年間の文学教育プログラムを組んでいる。

⁷ pp27～28, pp86～88参照。

⁸ 飯島吉晴『竈神と廁神』(人文書院、1986年3月、IIの第1章「廁考－異界としての廁」)

⁹ 「顔」「妹の着物」「化粧」の3作品を並べたときに何が見えてくるか。川端は女性のありよう、及び女と男の違いを、3作を通じて、明確に描きだそうとしたのであろう。「化粧」をよむ読者は、他の2作との対応関係を意識することでより豊かな意味作用を受けとる。3つのテキストがともに描きだすのは、自己の生の孤独に対して無心でいられず、おのれの生の回復・維持をはかる女性のありようである。

¹⁰ 川端は上野桜木町36番地に昭和6年から9年まで住んでいた。「『化粧』は上野桜木町の私の家の廁の窓が谷中の斎場の廁の窓と向ひ合つてゐて、ここに書いたやうなことを私は見た。」(「十六卷本『川端康成全集』第十一卷あとがき」昭和25年8月)と川端は述べている。

¹¹ 注2内部資料参照。

¹² 注4「教室の中のテキスト・一」pp54～58

¹³ 注3に同じ。

¹⁴ 川端の生い立ちから、〈聖なる女性〉を求めていたのは川端が内なる〈母〉を求めていたからであると考えたとき、個性のまさらった「化粧」の「私」を理解し、受け入れることもできるようになる。川端康成の母は川端が三歳のときに亡くなっている。川端の父は川端が二歳のとき、祖母は七歳のとき、祖父は一五歳のときにそれぞれ亡くなった。

¹⁵ 芳賀 登「近・現代における告別式と葬式の変化」(『葬儀の歴史』雄山閣出版、1996年4月、pp287～288)

The instructional method of Yasunari Kawabata “KESYO (make-up)”: Upbringing the “basic power,” “intellectual power,” and “practice power”

Yuji ONO*

ABSTRACT

The purposes of this study are as follows: (1) To elucidate a procedure to perform an upbringing of the “basic power,” “intellectual power,” and “practice power” that the field of education needs in literature education; and (2) to confirm the effectiveness of the procedure with concrete work.

Action that assumes switching the consciousness of a teacher and student is necessary to connect with the upbringing of national language that is a subject targeted along with the upbringing of general-purpose ability. A literature education teaches a student how to read literature texts. However, it is necessary for there to be instructional methods to let a child and a student understand a literature text through the literature education of the teachers' college. I aim to help provide an instructional method to increase the general-purpose ability of a child and the student from the student of the teachers' college in this article.

I devised a procedure to lead “power to read,” “power to interpret,” and “power to criticize” to advance up to “basic power,” “intellectual power,” and “practice power,” in eight phases. With that in mind, I made it clear that I can read a concrete literature text using the procedure. I discussed the fact that effectiveness was recognized by applying the procedure to a concrete text. The literature text I nominated for an example is the brief short story “KESYO (make-up)” by Yasunari Kawabata.

* Humanities and Social Studies Education